

授業探訪 総合教育科目総合 A 群

「現代社会とツーリズム」における いくつかの取り組みとその課題

前田 勇

はじめに

本稿は、2002 年度前期に担当した全学共通カリキュラム・総合 A 群 2〈歴史・社会〉科目「現代社会とツーリズム」に関して、授業内容と履修状況、授業テーマについてのリクエスト調査結果、授業に対する受講者の反応、および全体講評と改善点指摘などをまとめたものであり、同様な目的・内容をもった学科目が今後より有効な展開を図るための参考となることを意図したものである。

1. 授業の概要

本科目は、「ツーリズム（観光）に関する専門授業を初めて受講し、そしてこれが最初で最後の講義となる可能性の高い人びとを対象として行うことを意図したもの（シラバスより）」である。そのため、授業の内容は現代観光の諸相と課題等について、出来るだけ平易に、さまざまなトピックスを織り交ぜて構成した。また毎授業時に、当日の講義要点と資料、参考書を記したプリントを配付し、説明はすべて

OHC を使用し、また、適時ビデオを使用するようにした。

最初の授業日に説明した授業内容と展開計画は（表 1）の通りであり、10 回目の授業は、受講者の要望に基づいて講義テーマを設定することとした。また、成績評価は 6 回目と 12 回目の授業時間内に実施する「中間テスト成績（90 %）」に「出席（10 %）」を加えた「平常点」によって評価することを予め明示した。

2. 履修者と使用教室、中間テスト

確定した履修者総数は 239 名で、本学学生 93.7 %（224 名）、F キャンパス受講者 6.3 %（15 名）であった。全体の 49 % が本学 1 年次で、本学 2 年次ならびに 3 年次以上がそれぞれ 22・23 % を占めていた。本学学生の学部構成をみると、文学部 20.5 %、経済学部 36.0 %、理学部 5.0 %、社会学部 19.2 %、法学部 11.7 %、観光学部 0.8 %、コミュニティ福祉学部 0.4 % となっており、全学年次でみると、立教大学を構成するすべての学部・学科在籍者が履修していたことになる。

当初、配当された教室は「X304 番」であったが、説明会では着席できない学生が約 50 名おり、第 1 回授業時間においても同様であり、教室を変更することが必要となった。履修登録確定後にさまざまな調整を経て、第 4 回授業（5 月 14 日）より「5322 番」で授業を行えるようになった。

シラバスに記載し、さらに説明会資料でも示した通り、第 1～第 5 回までの授業内容についての第 1 回中間試験を 5 月 28 日の授業時間内に実施した。なお、収容人数の関係から、授業で使

用の「5322 番」に代えて「タッカーホール（1 階前方部分）」を使用した。

試験を行った翌週の授業時間（6 月 4 日）に、試験成績（フィードバック用スリップ）を各人に返却の上、試験結果を発表し、併せて各問題について正解を説明した。

3. 「リクエスト調査」

第 5 回授業終了時に、第 10 回授業日（6 月 25 日）で取上げを希望するテーマについて「リクエスト調査」を実施した。調査は、第 7 回以降の内

表 1 授業の内容と展開計画

月 日	講義の主な内容（配布資料記載を簡略化してある）	備 考
4	16 説明会	予定表配付（出）
	23 1. 観光史概観—世界の旅と観光の歴史を振り返る— * 旅の歴史、近代観光の成立過程	ビデオ使用
	30 2. 観光史概観—日本の旅と観光の歴史を振り返る— * “庶民の旅”の歴史、旅の発展と近代観光の成立過程	ビデオ使用
5	7 3. 観光のタイプ—観光の多様性を探る— * 「観光」の概念整理、観光のタイプ・パターンの分類	
	14 4. 観光と土産品—旅の思い出・他者へのメッセージ— * 土産品の意味するもの、観光における土産品の役割	ビデオ使用
	21 5. 観光におけるバリアフリー—より多くの人々が観光に参加できるため— * バリアフリーとは何か、観光における現状と課題	ビデオ使用（出） リクエスト調査
	28 6. 「テスト①」	事前に「掲示」
6	4 7. 観光の国際化と観光摩擦—国際交流の現状と課題— * 国際化進展による観光の変化、観光摩擦の増大と対応	ビデオ使用
	11 8. 観光と情報—映像情報の観光行動への影響— * 観光に与える情報の影響、観光行動と TV 情報の関係	ビデオ使用
	18 9. クロスボーダー・ツーリズム—観光と異文化理解— * クロスボーダー・ツーリズムの意味と現状、問題点	
	25 10. 未定—受講者のリクエストに基づいて設定— ◎5 月 21 日の授業時間にリクエスト調査を行い、要望に基づいて “特定テーマ”について講義	
7	2 11. 観光とイメージ—“日本のイメージ”を分析する— * 観光におけるイメージの役割、「観光 CM」の分析	ビデオ使用（出）
	9 12. 「テスト②」	事前に「掲示」

容としてすでに提示してあるテーマ以外に、(担当者が扱うことが可能な)新テーマを7項目提示して選択してもらう形式(複数回答)とし、それ以外のテーマについては自由記述を求め、また、すでに扱ったテーマをより詳しく再度説明することを希望する場合にはそのテーマ名の記述を求めた。

結果は(表2)に示した通りであり、サッカー・ワールドカップ共同開催国であることの影響もあって、「韓国における観光」を希望した者が半数以上で、調査結果を説明したうえで、第10回授業日(6月25日)ではこのテーマについて講義することを発表した。なお、第1回～第5回までのテーマを再度取り上げることを希望した回答が8.2%みられたが、内容では「観光と土産品」が最も多かった。また、「その他」の内容としては、「観光者の心理、人気のある観光地、旅行にみられる流行」「観光地におけるゴミ問題」「観光事業にかかわる人びと(例、ガ

イド、添乗員など)の話」「ディズニーランドの歴史」「ワールドカップと観光」などさまざまであり、それらと観光学部専門科目との関連について一般的説明を行った。

4. 第2回中間試験と最終成績評価

第2回(=最終)試験は、最終授業時間(7月9日)に実施する計画であったが、履修者数の関係から「最終授業時での実施不可」の指示があり、7月17日から24日までの試験期間内に実施することに変更することになった。第2回(最終)中間試験実施に先立って、最終授業日(7月2日)に、最終成績評価基準について再度解説し、理解の徹底を図った。

成績評価は、2回実施した中間試験の成績と出席点とを総合して評価する“平常点方式”であるが、第2回目の中間試験を受験しなかった者は“非受験者”として自動的に不合格対象となる。非受験者は63名であり、履修者総数(239名)の26.4%にあたる。

受験者(176名)についての最終成績評価分布は、A評価以上(Sを含む)26.7%、B評価31.8%、C評価23.9%であり、D評価(不合格)17.6%となった。なお、D評価者(31名)の内、9名は第1回目中間試験を受験していないため、合計点数不足として不合格となった(3年次以上に多い)。

表2 「リクエスト調査」の結果

<%, MA>

新しい テーマ	韓国における観光	55.3
	日本旅館論	24.7
	観光振興論	20.6
	観光からみたミュージアム	17.6
	文化観光論	12.9
	ヘルスツーリズム論	11.8
	宿泊業の変遷	10.6
	その他	18.2
第1回～第5回までのテーマを再度		8.2

5. 受講者からの反応

最終授業日の講義終了後に、受講者を対象として授業についての「アンケート調査」を実施した。「アンケート調査」は、“興味をもった授業はどれであったか”に関する部分と、今後観光に関する専門科目を“履修あるいは聴講してみたいと思うか”をたずねた部分から構成した。なお、調査実施日（7月2日）の出席者は170名であったが、当日のほかに出席をとった第

5回にも出席していた者を“授業全体への参加者”と考え、この条件を満たす151名だけを集計対象とした。

「興味をもった」と回答した割合が最も多かったのは「観光と土産品」で全体の66%があげており、1年次とくに文学部在籍者から多くあげられていた。続いて多いのは、「観光とイメージ」ならびにリクエスト調査で最上位を占めた「韓国における観光」で、1年次の文学部・社会学部在籍者にやや多くなっていた（表3）。

表3 興味をもった授業

<%(*), MA>

授業テーマ	区 分	全 体 合 計	1 年次 計	学部別				2 年次 以上計	F キャンパス
				文 学	経 済	社 会	法 学		
観光と土産品		65.6	72.8	89.3	45.0	65.8	76.5	57.5	50.0
観光とイメージ		47.7	45.6	46.4	35.0	44.7	58.8	52.5	50.0
韓国における観光		43.7	49.5	57.1	40.9	52.6	41.2	32.5	25.0
観光におけるバリアフリー		20.5	19.4	10.7	25.0	23.7	17.6	25.0	12.5
クロスボーダー・ツーリズム		16.6	14.6	3.6	45.0	7.9	11.8	22.5	12.5
観光と情報		15.2	13.6	14.3	15.0	13.2	11.8	15.0	37.5
観光史概観		11.9	11.7	10.7	10.0	10.5	17.6	12.5	12.5
観光の国際化と観光摩擦		9.3	6.7	10.7	—	—	23.5	12.5	25.0
観光史概観		7.9	6.7	3.6	5.0	7.9	11.8	12.5	—
観光のタイプ		5.3	4.9	10.7	5.0	—	5.9	5.0	12.5
興味をもったものとくになし		1.3	1.9	3.6	—	—	5.9	—	—

*・・・%は全体、学部・学科等の区分別に算出した値。

表4 “観光に関する専門科目”履修・聴講の意向

<%(*)>

意 向	区分別	全 体 合 計	1 年次 計	学部別				2 年次 以上計	F キャンパス
				文 学	経 済	社 会	法 学		
機会があれば履修・聴講してみたい		67.5	67.9	75.0	45.0	76.3	64.7	62.5	87.5
分からない		29.8	28.2	25.0	50.0	21.1	23.5	37.5	12.5
とくに履修・聴講したいと思わない		2.6	3.9	—	5.0	2.6	11.8	—	—

*・・・%は全体、学部・学科等の区分別に算出した値。

“観光に関する専門科目”を「機会があれば（再び）履修あるいは聴講してみたい」と回答した者が67.5 %を占め、Fキャンパス受講者では87.5 %に達しており、「とくに履修・聴講したいと思わない」と回答した者は2.6 %（実数では4名）のみであって、本学学部生ならびにFキャンパス受講者に観光に関する専門科目受講に対する興味・関心がかなりあることを示唆する結果となっていた（表4）。

6. 試験結果内容からみた問題点

“成績不良者”が多く、その原因は①授業時間中の集中力欠如、②試験問題に対する理解力不足の2点に要約される。第1回ならびに第2回（最終）に分けて実施した試験では、受講者が“初めて観光について学ぶ授業であること”，履修者の約半数が1年次生であることを考慮し、できるだけ平易な内容・形式の問題を作成した。問題の構成は、第1回・第2回とも各回ごとの授業について全体を要約的に説明している文を示したうえで、Ⅰ．文中の空所にあてはまる語句・人名・年数等を記述させる形式が60 %（各記述3点×20か所）、Ⅱ．関連する設問（文章題）について所定欄内に文章記述させる形式が40 %（各10点×4問）となっていた。

Ⅰの記述を求める語句・人名・年数等は、第1回試験で20項目中19項目、第2回試験では20項目のすべてが毎

回の授業開始時に配付した「講義要旨」に記載されているものであり、また、記載されていない第1回試験問題の1項目は、解答に直接関係したビデオを授業時間に上映したものである。しかしながら、第1回試験の平均正解率は44.5 %（平均26.7点、60点満点）であって、第2回試験平均正解率もほぼ同様であった。これが、試験にあたっての学習不足によるものであることはいうまでもないが、各回の授業が取扱ったテーマが“ひとつの文脈”として理解できていないことを示しており、その大きな原因は授業時間中に集中力をもって受講していないことであると考えられる。

Ⅱの文章題については、第1回は各2行、第1回は各3行の解答記述欄を設けたが、ここでは設問の意味を正しく理解せずに、質問文中にある“ことば”に反応してしまい、題意とは直接かわりのない記述をしている例が多くみられた。

「観光におけるバリアフリーを推進するにあたって、施設面での整備とともに、改善する必要があると考えられる事柄について説明しなさい」〈第1回試験問題中の1問〉という設問は、“施設面での整備以外の事柄”について記述を求めていることは明らかであるにもかかわらず、施設面整備の必要性のみを記述してしまう者が多い。また、「韓国における観光発展パターンを日本の場合と比較して、その特徴を

説明しなさい」という設問（第2回試験問題中の1問）は、韓国における観光発展パターンの特徴を、日本と比較して指摘することを求めたものであった。日韓における観光発展の違いについては授業時間で説明していたが、韓国の観光の特徴や近年の動向などについて短絡的に記述してしまう者が多かった。

このように、設問の意味を正しく理解できない者が多いため、平均正解率は問題Ⅱよりも低く、第1回試験の平均正解率は29.0%（平均11.6点、40点満点）で、より問題を平易にした第2回試験においても約35%にとどまっている。

問題に対する理解力不足は、大学入試のための勉強方法、入試問題そのものにも密接なかわりをもつ“読解力の乏しさ”のひとつの現われであり、現代大学生に共通する問題のひとつであると考えられ、本科目の試験結果からもこの傾向が認められた。改善を図るためには、さまざまな機会をとらえての指導が必要であり、とくに読解力向上の基本として、読書機会を増やすことの重要性が改めて指摘できる。

7. 課題となるもの

1) 教室・器材等の授業環境の改善

使用した「X304」「5322」教室ともに、マルチプロジェクターが用意されており、毎授業時にOHCならびにビデオを使用することに基本的には支障

はなかった。しかし、プロジェクターおよびコード類を教室備えつけの収納庫から取出してセットすることが必要なため、授業開始前の設置および終了後の片付けにそれぞれ約10分程度の時間を要した。教室が「5322」に変更になってからは（5月14日以降）、前の時間（I時限、9:00～10:30）に授業が配当されていなかったため、授業開始10分前に教室に赴き、準備にあたることができたが、「X304」使用の時期は前時間に授業があるため、授業が10分程度遅れて始まる傾向にあった。OHC、ビデオ、スライド等の授業で使用する機器がすべてビルトインされている教室が増えれば解決する問題であるが、現状では少しずつ改善を図り、利便性と効率を高めるための取組みが求められる。

本科目は、総履修者239名、実質的受講者約180名であるため、いわゆる大教室授業とはいえないが、授業要旨配付、出欠確認、受講者に対する調査実施（2回）を授業時間内に行うためにさまざまな工夫を要とした。とくに「説明会（授業予定表・出席表配付）」開催時には1名（ただし、最初の約30分間のみ）、「1回中間試験実施」にあたっては2名、第1回中間試験結果の各人別返却にあたっては4名（ただし、授業時間最後の約20分のみ）、観光学研究科在籍大学院学生の協力を得ることによって対処した。本科目での対応は、個人的依頼による不安定な措置で

あったことは否めないところであって、授業科目の必要に対応じTAを弾力的に使用できる制度導入が検討されることを望みたい。

2) 学生の受講態度に関して

授業開始にあたって配付・説明した資料の末尾には、5. その他の注意として、次の事項が記載されていた。

「授業時間中の“飲食物”の摂取、携帯電話の送受信ならびに機器音を発生させることを厳禁します。また、教室内では常に脱帽すること」

授業期間を通して、受信確認を行っていた者はしばしばみられたが、携帯電話の受信音を発生させた例はなく、この面での受講態度にはとくに問題はなかった。しかし、授業中に飲物を摂取してしまう者がおり、また、注意するまで着帽のままでいる者も毎時間みられ、“悪いマナー”が身につけてしまっている学生が少なからずいることが認められた。

個人としてだけではなく、“国民としての”マナーが問われやすい観光についての授業であるだけに、悪いマナーを改めることの大切さを授業中に幾度も指摘してきたが、完全に払拭することができなかったのは遺憾である。

また、Fキャンパス受講者からは、“立教の授業は学生が騒がしい”との批判の声があるときいているが、この点については、適時注意をすることによってほぼ静かな状況を保つことができたものと考えている。しかし、授業

開始後60分を経過した頃から、また、ビデオ上映から講義に再び切り替わる時など、ザワザワと私語が飛び交いやすくなり、繰返して注意することを常に心がけていた。

受講態度に幼稚さのある学生が少ないことは残念ながら否定できない事実である。社会とくに国際社会に通じるマナーを身につけ、自律的に行動することのできる学生をより多く育成するために何をなすべきかを検討することは、学生本人を含めて大学を構成するすべての人びとに共通した課題である。“悪いマナーと習慣”の是正には、全学に共通する基準が求められ、放置したり、無関心であることそのものが問題であるという共通認識が必要である。ある授業では厳しく注意がなされるが、他の授業ではなんの注意もなされないということでは、“悪いマナーと習慣”を払拭することにも限界があることはいうまでもないのである。

むすび

冒頭にも記したように、「本科目はツーリズム（観光）に関する専門授業を初めて受講し、そしてこれが最初で最後の講義となる可能性の高い方々を対象として行うもの」であったが、担当者にとっても、さまざまな学生を対象として、比較的新しいトピックスを中心とした毎回完結型連続講義という“最初で最後の授業”となった。とく

に履修者の項にも記したように、立教大学を構成するすべての学部・学科在籍者が履修し、さらにFキャンパスが加わっていたという文字通り多様な受講者であった。

担当者は、観光の歴史と仕組み、観光における人間の役割等を中心にできるだけ平易に説明し、豊かな観光を実現するために不可欠な“よい観光者”をつくることを心がけたつもりであったが、その思いは多少はかなえられたものと考えている。

観光学部以外の学生が、観光関係学科目に興味と関心をもっていることは「受講者調査」結果からも認められるところであり、観光学部関係教員はこのことを十分ふまえて授業に臨むことが必要である。

授業展開にあたって、さまざまな面で支えていただいた多くの関係者の方々への感謝をもって、本報告のむすびとしたい。

まえだ いさむ

(本学観光学部教授、総合A群科目担当)